

# 蓮華生とチベット仏教

## Padma-hbyun-gnas and his position in Tibetan Buddhism

矢 崎 正 見

### はじめに

八世紀中葉、時のチベット国王チソンデツェン (Khri-sron-lde-btsan) に招かれて入蔵、サムエ (Bsam-yas) 寺の建立に尽力し、秘密仏教の布教伝導を行った蓮華生 (Padma-sambhava, Padma-hbyun-gnas) の略伝と、その思想を紹介し、併せて、彼がチベット仏教史上において占める位置について考察しようとする事が本稿の目的とする処である。

### I 略伝と思想の特色

〔名称〕パドマサムバーヴァ (Padma-sambhava・蓮華生)を中国仏教では巴特瑪繖巴幹(幹)・巴特瑪薩木巴瓦・巴摩娑盤婆等と音訳する。チベット名をペマジュンネ (Padma-hbyun-gnas) といい、チベット人は彼をグルリムポチェ (Guru-rin-po-che・宝師)、グルペマ (Guru-padma・蓮華師)、ロブポン (Slob-dpon・師)、或いは単にグル (師)、リムポチェ (宝) 等と呼び、また、彼の生地が下記の如く、インド北西のウルギャン (Urgyan) であるところから、ウルギャンペマ (Urgyan-padma・ウルギャン生れの蓮華)、或いは単にウルギャン (ウルギャン生れの人) 等とも云う。

〔家譜〕カシミールの北西、ウルギャン、或はウッディヤーナ (Uḍḍiyāna・烏耆延那・烏伏那)、即ち、現在の西パキスタン、カフィリスタン (Kafiristan) に出生。ジュニャナシディ (Jñāna-siddhi・智慧成就) 等、多くの書を著

した碩学の王侯、インドラプーティ (Indrabhūti) の一子として生まれた。一説によると、同時代の入蔵インド僧、シャーンティラクシタ (Śānti-rakṣita・寂護) の妹、マンダーラヴァー (Mandārāvā) と結婚したと云われているが、家系その他については詳かではない。

〔修学〕長じて、当時のインドにおいてタントラ (tantra) 仏教の中心地であったベンガル地方において修学し、のちに、瑜伽行 (Yogocariya) 派系統の密教学者として、ナーランダ (Nālanda・那爛陀) 寺で活躍し、その名声を内外に広めるに至った。

〔活動と業績〕当時のチベットは仏教の興隆に対して熱心であったチソンデツェン (754年頃即位) 王の治下であったが、王はその頃、在蔵中のシャーンティラクシタと共に、ラサ (Lhasa・拉薩) 郊外のマルポリ (Mar-po-ri・赤い丘) に寺院を建立しようとした処、雷電・地震等のさまざまな災害が国内の各地に起った。之は仏教に敵対する悪魔の所業であると考えられたので、シャーンティラクシタは之を退治するように命じられたが、彼にはその能力がなかった。そこで、シャーンティの請によって、チソンはパドマをチベットに招くこととしたのである。招かれて入蔵したのち、パドマはシャーンティと協力して、マルポリに北インドのオタントプuri寺 (Oṭantapuri Vihāra) の伽藍に型をとり、サムエ寺を建立した<sup>①</sup>。更にインドより12名の説一切有部 (Sarvāstivādin) の比丘を迎え、7人

のチベット人を出家せしめ、また、王ならびに選ばれた数人のチベット人に陀羅尼(dhāraṇī)の秘義を授け、『空行母火焰熾盛呪(Mkhaḥ-ḥgro-ma me-lca-ḥbar-ba · Dākinī-agnijihvā-jvala-tantra)』等のタントラ経典を講義したり、<sup>②</sup>或いは各種の密教経典の翻譯をなす等、秘密仏教をチベットに紹介する事に尽力した。<sup>③</sup>

〔著述〕(1) Dam-tshig lña-pa (五種三摩耶・デルゲ版東北大目録 No. 1224)

(2) Hphags-pa lag-na rdo-rje gos-sñon-po can-gyi sgrub-thabs-kyi man-ñag rgya-cher-bśad-paḥi ḥgrel-pa (聖金剛手青衣成就法優波提會広釈註・全上 No. 2214)

(3) Rdo-rje rnam-par-ḥjoms-pa shes-bya-baḥi gzuñs-kyi rnam-par-bśad-pa rdo-rje sgron-ma shes-bya-ba (金剛摧破と名づくる陀羅尼積金剛燈・全上 No. 2679)

(4) Dpal ḥjig-rten mgon-po mkhaḥ spyod-paḥi sgrub-thabs shes-bya-ba (吉祥世間尊空行成就法・全上 No. 2729)

(5) Them-yig gsañ-ba shes-bya-ba (秘密書状全上 No. 3049)

(6) Khor-yug mñar-baḥi sgrub-thabs shes-bya-ba (周縁愛樂成就法・全上 No. 3186)

(7) Tshig lhug-paḥi a-ra-pa-tsa-naḥi sgrub-thabs (長行述阿羅波遮那成就法・全上 No. 3310)

(8) Gshal-yas-khañ gsañ-bar-byed paḥi mñon-rtogs mun-sel sgron-ma (超量殿作明現觀闍減燈・全上 No. 3706)

× × × ×

上述の略伝によって窺い得る如く、インドにおいてはナーランダ寺にあって密教有数の学者として活躍したが、入蔵後はチベットにおいて、

何等の障害・抵抗もなく仏教を興隆せしむるために、巧みに同国在来の宗教であるボン(Bon)教の思想と融和した教義を案出した。すなわち、彼以前にチベットに紹介されたアサンガ(Asaṅga 無著)系統の瑜伽派で奉ずる諸々の仏や菩薩と、ボン教で祀る処の諸神との類似点を強調したり、また、竜樹(Nāgārjuna)系統の中観派の諸仏・諸菩薩が、ボン教の諸神となってチベットの国土に現われたという、一種の本地垂迹説を立てること等により、ボン教、乃至ボン教徒という、当時のチベットにおける反仏教勢力からの障害なしにチベットにおいて仏教を伝播しようと、ボン教に対する配慮の点では誠に細心であった事が窺われるのである。

一方、インド仏教そのものについては、彼自身がタントラ仏教の中心地であったベンガールで学び、瑜伽行派に属する密教学者であったという点から、当然の事ながら、当時、南方インドにおいて流行していたタントラ仏教の系統の要義を第一義と考え、また、普賢法身の思想を無上秘密乗(Bla-med gsañ-baḥi theg-pa)と名づけ、大喜樂禪定(Bde-ba-chen-poḥi tiñ-ñe-ḥḍsin)とよぶ瑜伽法をもって、最上の教と考えて居たのである。

## II 入蔵前後におけるチベット国内の実状

パドマサムバーヴァの活躍した八世紀中葉の時代、インド国内にあってはアーディトヤセーナ(Ādhityasena)によって確立された、いわゆる後期グプタ(Gupta)王朝がカシミールのラリタディトヤ(Lalitāditya)に滅ぼされ、更に、ゴパーラ(Gopāla)がベンガールにパーラ(Pāla)王朝を樹立した時代であった。

同じ時代のインド仏教々団内部は如何であったかと云えば、知らるゝ如く、インド仏教は四

世紀から五世紀末にかけてのグプタ王朝の時代がその最盛期であったが、これが、中国より玄奘が入竺した時代、すなわち七世紀の前半からは衰滅の一途を辿り、この間、因明のダルマキールティ (Dharmakīrti・法称)、中観派にチャンドラキールティ (Candra-kīrti・月称)、ハリバドラ (Haribhadra・師子賢)、入蔵僧のシャーンティラクシタ、カマーラシーラ (Kamalaśīla・蓮華戒)等の著名な論師が輩出したが、いわゆる大乘仏教の教勢は、回教とインド教の攻勢に遭い、その勢力は凋落の一途を辿り、仏教の教義内容としては金剛乘 (Vajrayāna) と称する新しい教派、すなわち秘密仏教の出現を見たのである。特に、大乘仏教中、竜樹系統の中観派と弥勒の流れを汲む瑜伽派は本来、相補うべき思想であったのが、時の流れと共に対立する学派を形成して行き、大乘仏教末期に至っては、瑜伽派の勢力は頓に衰え、之に反して中観派は次第に密教化することにより、その余勢を維持し得たのである。パドマがこのように衰微の道を辿る瑜伽派に属した事は、彼がインド本土を離れてチベット国内に瑜伽密教の教勢拡張を志向した一つの理由ともなるのではなからうか。

一方、このようなパドマを迎え入れたチベット国内の状況はどうであったかと云えば、前述の如く、八世紀中葉のチベットはチソン治下であったが、チベットへの仏教初伝は六世紀中葉より七世紀中葉にかけてのソンツェンガムポ (Sroñ-btsan-sgam-po) の時代であり、王がトンミサムボータ (Thon-mi Sambhoṭa)等をインドに送り、インド文化の招来と、同時に仏教を導入し、更に中国王室の女、文成公主とネパール王女ブリクティ (Bṛikṭi) との二人の妃を通じて仏教との接触を持った等、王室の名における仏教のチベットへの招来という点で、ソンツェン

の功績は多大であると云わねばならぬが、当時における仏教のチベットへの伝播は、もとよりチベット社会全体へ侵透したと云うべきものではなく、上部社会の王室ならびにその周辺の一握りの人々によって仏像が安置せられ、之に対する信仰がなされたに過ぎないと見るのが妥当であろう。寧ろ、仏教の本格的伝来という意味では上記チソンの治下こそ、その時といえよう。然しながら、チソン治下のチベットにおける仏教の伝播も、決して平坦な道の上で、何等の障害なしに行われた訳ではなかった。

チソンの即位は彼が13才の時と云われている<sup>⑤</sup>。王位にはついたが、幼少の彼に政治・行政の実権はなく、補弼の任に当たった大臣等が恣に政権を握り、単に行政上の権利行使のみならず、国家運営の宗教的理念に対してさえ、容喙するという状態であった。すなわち、ボン教に傾倒する大臣達はソンツェン以来、チベットに建立された様々の仏教堂宇を破壊し、インド・中国・ネパール等からの入蔵僧の追放を行う等、仏教に対する様々の弾圧を行ったのである。ソンツェンの即位後、歴代王室の名によって招来せられた仏教が、臣下の大臣達によって破壊されるのを目前に見たチソンは成年に達して政治権力を政府高官の側近の手から奪い取った後、仏教の尊重を彼の国王としての姿勢の根本に採用したのであった。即ち、中国・インド・ネパール・カシミール等から、仏教に通暁した学僧を招き、特に使を当時のマガダ (Magadha) 国に送り、前述の如くナーランダ寺の学僧パドマサムバーヴァを迎え入れたのであった<sup>⑥</sup>。チソンによるこのような仏教興隆の舉は、もとより彼一人の意志によってのみ行われたものではなく、その背景に親仏派の政府高官達と排仏派の高官達による仏教乃至ボン教を軸とした権力闘争が展開さ

れ、夫々の権力の強弱を裏楯としてチソンによる仏教復興の運動が行われた事実を物語って居るのであった。即ち、チソンの幼少の時代にはボン教に親しむ大臣達が権力を握って居り、ために上記の如き廃仏の事が行われたが、チソンの成長と共に次第に親仏派の大臣達が力を持ち、かつてボン教支持の人々によって仏教堂宇の破壊が行われたのに対して、之に対する一種の報復行為として、ボン教派の大臣達を生理めにした事などが史書バサムジョンサン(Dpag-bsam-ljon-bzan)に記されている<sup>⑦</sup>。

然るに、チソンによる仏教の興隆運動がさまざまに行われて居る折も折、たまたま、首都ラサのマルポリを中心に雷電、降雹等の不吉な前兆が現われた。そして、前述の如く、之が直接の原因となって、パドマが招かれて入蔵する事となったのである。

斯くの如く、パドマが入蔵した理由を彼の入蔵前後におけるチベット国内の現状に徴して考察する時、先ず考慮に入れねばならぬ事は、当時のチベット王室を取りまく人々の間における親仏・親ボン両派の勢力闘争が熾烈な形で展開されて居た事である。更に、この争いが実は権力志向の戦いでありながらも、それが具体的に表現された形態は仏教とボン教の争いであるという形を持って居り、しかもその宗教的優劣はそのそれぞれが持つ呪術的な力の強弱によって決定されねばならなかったという点であった。このように呪術性の強弱が宗教としての優劣に結びつくという思考が、当時のチベット人によって持たれねばならなかった理由の第一に考えられる事は初期のチベット社会において、当然の事ながら、宗教に対するチベット民族の志向がそのような方向へ向った事による。すなわち八世紀中葉のチベット社会は草創の時代から僅

か二百余年を経たにすぎない未開社会であった。このような社会にあって、人々が宗教に求めるものは招福攘災の偉大な力以外の何物でもなく、二つの宗教の内、何れか一つを選ぶとすれば、そのような力がより強いものを選択すること、当然であろう。在来の宗教たるボン教の存在する処へ、仏教が之を排除しながら押入ろうとすれば、より強力な呪術性を誇示しなければならなかった事は自然の理であった。第二に、当時におけるチベット人達の志向の質もさる事ながら、ボン教そのものが持っている呪術的要素にも注目しなければならないであろう。ボン教に関しては、その宗教的起源・教義等、不明な点が多いが、その根本義とする処は、宇宙空間に様々の靈魂が浮遊して居り、その結合によって人の世の吉凶禍福が決定すると考えるのであるから、この精霊に対して祭祀を行い、祈禱する事によって攘災招福を計ろうとする。しかも、その祭祀の具体的な方法は巫僧による一種の心靈術の如き手段が採られるのである。このようなシャーマニズムの宗教儀礼を根本義とするボン教に対抗するためには、仏教も、その持つ呪術的な面をもって対抗せざるを得なかったのである。と云うより、徒らに高遠な教義を説いたり、或は清浄な戒律による生活規制を唱えたりした処で、到底、当時のチベット人によって受け入れられる事はなかったであろう。第三に、呪術そのものとも云えるボン教に対抗すべく招来されたインド仏教そのもの、性格が、幸か不幸か、所謂、密教であった事をその理由として挙げる事が出来る。シャーンティといい、パドマといい、当時における殆んど大部分の入蔵僧はインドにおける末期仏教たる密教の洗礼を受けた僧侶であった。この事実は、彼等が好むと好まざるとに拘らず、ボン教の呪術的要素に対し

て、同じく呪術をもって対抗せざるを得ない結果を招いたのであった。

斯くて、呪術仏教のチャンピオンとして、パドマはシャーンティラクシタの要請により、チソンに招かれて、仏教とボン教の闘争場裡に登場したのであるが、彼のチベット仏教において占める地位を明らかにしようとする時、その考察の根底には上記の如きチベット王室を取りまく仏教とボン教の血みどろの闘争が行われて居た事を前提としなければ、と云うより、このような仏・ボン両教の抗争がパドマをしてチベット仏教の上に逆に彼の地位を下さしめたと云うべきであろう。それでは、彼は一体、如何なる位置をチベット仏教史上に占めるのであろうか。以下、更に論を進めること、しよう。

### 3 チベット仏教史上におけるパドマの位置

パドマのチベット仏教史上における地位を考察する場合、二つの流れを考慮に入れねばならない。即ち、その一つはチベット仏教における秘密教の歴史の中でのパドマの位置であり、他の一つはチベット仏教全体の流れの中に置かれる彼の位置についてである。

先ず前者については、チベットにおける密教の歴史は二つの時期に分けることが出来る。即ち、パドマの時代を去ること約一世紀、ランダルマ (Glan-dar-ma) の在位中に、周知の如くチベットにおいて仏教に対し空前絶後の大弾圧が行われ、ソンツェンの時代に初めて仏教がチベットに伝播されてから、約300年間に亘って営々として築かれて来たチベット仏教は潰滅に瀕する大打撃を受けるに至ったのである。そして、その後、約100年の間、無仏教の時代が続いた後、西方ガリ (Mñah-ris) 地方に958年の頃、リンチェンサムボ (Lo-chen-rin-chen-bzan-po) が

出て、パドマの伝えた密教を復興し、ここにランダルマ以前の所謂、ガタル (Sna-dar・前伝) 仏教に対してチタル (Thyi-dar・後伝) 仏教の時代に入るわけであるが、この新しい密教は同じ頃、東部カム (Khams・喀木) 地方から起った戒律系統の仏教と共に、一旦、滅亡に瀕したチベット仏教を復興するという枠中で主軸をなした関係上、パドマ当時の密教とはやゝ、その色彩を異にしていた<sup>⑨</sup>。この後伝仏教における新しい密教に対して、より呪術的であり、よりボン教に近い傾向を有していた破仏以前の密教は秘密古派 (Gsan-snags-gñin-ma) 又は大究竟派 (Rdsogs-chen-po) と呼ばれて居るが、パドマはこの古派の祖と考えられて居るのである。即ちチベット仏教史上、その主軸をなす秘密教は、ランダルマによる破仏を機として新旧二つの流れに分断せられ、旧派密教の祖がパドマであり、新派の祖が上記のリンチェンサムボとされて居るのである。リンチェンの復興・提唱した新密教はパドマ流の古派密教と、その教義において幾多の相違点を持つてはいるが<sup>⑩</sup>、全体的な密教の流れについて見るならば、リンチェンが開祖とされる新秘密教の流派がその後のチベット仏教の主軸となって、顕教が稍々、軽視される傾向が生じたため、十一世紀におけるアティシャ (Atiśa) の入蔵を見たのである。そして、アティシャの入蔵によってチベット仏教における秘密教重視の傾向は略々、是正され、顕密相関の教たるチベット仏教の一つの特色が発揮されたのではあるが、アティシャの流れを汲む新興諸派の内、ゲルクバ (Dge-lugs-pa) を除いては総て密教の色彩が濃厚であり、チベット仏教が本来具有する密教的色彩は拭うべくもなかった<sup>⑪</sup>。そして、そればかりでなく、このような密教的色彩は時の流れと共に左傾化の方向を辿り、遂

に十四世紀末におけるツォンカパ (Tsoñ-kha-pa) による宗教改革が行われたのである。

次に、チベット仏教史全体の流れの上におけるパドマの位置については上述のツォンカパによる戒律主義の仏教復興運動の展開に伴って成立した新しい宗派を黄帽派 (Shwa-ser-pa)、或いは德行派 (Dge-lugs-pa) と呼び、之に対して旧来の宗派は紅帽派 (Shwa-dmar-pa)、或いは単に古派 (Rñin-ma-pa) と呼ばれたが、この前者、黄帽派の祖はツォンカパとされ、パドマが紅帽派の開祖とされているのである。ツォンカパはリンチェン流の左傾密教の是正を目的として宗教改革をチベットにおいて展開したのであるが、そして、密教の流れそのものがランダルマの廃仏を契機として二分されては居るが、改革後のツォンカパの流れを顕教と見る立場からは密教全体については、やはりパドマがその開祖とされるのである。すなわち、全チベット仏教史をツォンカパによる宗教改革を境として新旧の両仏教に分けると、旧教即密教という立場からは新教のツォンカパに対して、旧教の開祖と考えられているのがパドマなのである。従って旧派のラマ教にあっては、チベット守護聖としての彼の像は釈尊のそれと全く同等の位置を祭壇において占める程に尊敬を払われているのである。これによっても、ツォンカパ以前のチベット仏教において、パドマの占める位置が如何に重要なものであるかを知ることが出来る。

パドマの教学がチベット仏教史、特に前記、前伝仏教において強く根をおろすに至った今一つの出来事があった。即ち、八世紀の中葉、チベットにおいてインド伝来の中観派系統の学派と中国から移入された瑜伽派系の一団との間に確執があり、時の国王チソンデツェンの面前においてインド僧カマラシーラ (Kamala-śīla) と

中国僧大乘和尚 (Mahāyāna Hwa-can) との間に法論が行われ、この法論においてはカマラシーラ一派が勝利を得、この結果、これ以後のチベットにおいては大乘和尚はチベット国内より追放せられ、中国瑜伽派の布教は禁ぜられ、インド系の中観派仏教のチベットにおける伝導が公認されることになったのである。この法論が行われた理由について、プトン (Bu-ston) の仏教史には法論に参加したインド僧ペヤン (Dpal-dbyaṅs) は受戒の規範師に任命されて戒律の伝統護持に意を注ぎ、同じく法論のインド側代表者の一人エセワンボ (Ye-sés-dbañ-po) はログック (Lho-brag) において瞑想中、中国の大乘和尚一派は大いに増加し、而も「全く思考をなさぬ者こそ、この現世の生活よりた易く脱れ得るのであり、如何なる思考も探求も行為もないという事は正しい意味の無所得を齎すこととなる。かくの如き方法によってこそ、人は悟りの境に到るのである」という頓悟流の教義を喜ぶチベット人達も次第に増加し、一方ではシャーンティ流のインド仏教の信奉者も多く、この両者の間に争いが絶えなかったので、チソンは「シャーンティの教義に示された見方によるべし。」と勅命を下し、之を中国派の人々が怒ったのが、この法論の直接原因であるとして居るが、実はその裏にチソンを中心とするチベット王室のインド並びに中国に対する見解の差異が大きく影響して居たのではなかろうか。即ち、チソン治下の蔵中関係は唐書にも記される如く常に于戈を交える状態であり、就中、応徳元年 (763) 十月の如き、藏軍二十余万は長安にまで侵入し、時の中国皇帝代宗は陝洲に逃れるといった侵寇が行われたのである<sup>19</sup>。之に反し、チベットのインドに対する態度は如何であったかと云えば、ソンツェン時代に使をインドに遣して仏教を主

軸とするインド文化の吸収をはじめてより、インドをチベットにとって文化的に母国と見ていたような観があるのであった。このように中国インド両国に対する見解の相違が、チベット国内において同じように伝導されて居た中国仏教とインド仏教に向けられた時、前者を国外から追放し、後者をチベット国内において公認しようとする意図のもとに、最初から仕組まれた法論と見ることも、強ち不当な解釈とは云い得ないであろう。それかあらぬか、プトンの記述する処によれば、チソンによる法論の計画は秘密裡に行われて居たのが、大乘和尚により察知せられ、和尚は之に対抗するために「禪定眠臥の法輪 (Bsam-gtan-ñal-baḥi-ḥkhor-lo)」を著したとされて居る<sup>⑨</sup>。更にこのような意図をもってなされた法論は中国側の大乗和尚の敗退によって終ったのであるが、この時、チソンによって「教義に関しては龍樹の教学を採用すべく、実践に関しては十法行と十波羅蜜を学ぶべし。且つ、中国流の頓悟教学は之が布教を許さない」と云う命令が如何程嚴重に守られたであろうか。竜樹流の中観仏教を採用する事を勸奨しながらも、チソン自身が瑜伽派のタントリスト、パドマを招聘してその呪術力に依頼しているのである。チソン以後数十年を下ったラルパチャン (Ral-pa-can) の時代に至るまで、チソン滅後のチベット王朝の動き、並びにチベット仏教の動静については、その詳細は不明であるが、ラルパの時代となって、再びチベット仏教は隆盛の時期を迎えたが、この時、王の命令により説一切有部以外の小乗經典と秘密教の密呪等の讎訳は一切禁止の勅令が発せられたのである。しかしラルパによる勅命には前伝仏教における仏教中興の祖たるチソンの遺命を汲む処は少しも見られないのである。斯くの如き事実より見来る時、

法論の目的とする処は仏教の教義・儀礼の内容如何というよりは、あくまでもインド仏教の庇護と中国仏教の追放にあったと考えられよう。このような機運の中で、パドマはインド、ナーランダ寺の碩学として招かれて入蔵したのであった。とすれば、チベットにおけるインド仏教の確立の上で彼が果さねばならなかった役割りにも当然、注目しなければならないのである。

#### 4 むすび

パドマサムバーヴァが招かれて入蔵した直接の理由はチソンによって行われた仏教保護の姿勢に反対する悪魔の調伏であった。この限りにおいては、彼がチベット仏教において占める位置は呪術力に富むタントリスト以外の何物でもなかった。然るに、入蔵後の彼がその後のチベット仏教史上に占める位置として、上述の如く、1.インド仏教のチベットにおける教勢確立者、2.旧派密教の開祖、3.旧教の祖という三つを挙げることが出来るのであるが、この三つの立場に彼を立たせしめた夫々の契機と、その契機を作り上げた根拠はやがて、今日における全チベット仏教を所謂、ラマ (Bla-ma) 教として成立せしめた要素と全く合致するものでもあった。即ち、先ず彼をしてインド仏教の教勢確立の主導者たらしめた契機となったものは、チソン治下におけるカマーラシーラと大乘和尚との法論であり、この法論を起さしめた動機は上述の如く当時、というよりソンツェン以来の伝統的チベット人の思考たるインド文化の尊重であった。次の旧派密教の祖たる位置はランダルマの破仏を契機として、それ以後の新しい秘密教の開祖リンチェンサンボに対し、旧派の祖としての立場が与えられたのであるが、このランダルマによって行われた破仏はその根拠に仏教とボン教

を軸とする、王の治下における権力闘争を根底に含むものであった。初期のチベット仏教において、ボン教との宗教的な戦いはチベット仏教にとって一種の宿命でもあった。パドマの入蔵を求めたチソン治下のチベット仏教界にも、ボン教との確執の中から、パドマの入蔵を機として、ボン教に一大打撃を与えようとした意途は勿論、存していた。更に、宗教を軸とした政治権力の獲得を目的とした争いは、後代のダライラマ制確立期に及んでも繰返し展開された処であった。第三の旧教の祖としてのパドマの出現は、その契機たるものは無論、ツォンカパによる宗教改革であったが、この場合のみ、左傾した密教の是正という純粋に宗教的動機から改革が行われたのであった。然しながら、密教と顕教という立場から見ると、ツォンカパの改革によって密教の左傾化阻止の実は挙げ得たにしても、もとより、チベット仏教そのものが持つ密教的色彩を完全に払拭し得たわけでもなく、又、ツォンカパ自身の意途も呪術的密教のチベット仏教からの完全な排除ではなかった。事実、14世紀後半から15世紀にかけてのツォンカパ出現以後のチベット仏教の性格の中に、多かれ少なかれ呪術的密教の色彩は色濃く存在して居るのである。が、兎も角も、パドマを旧教の始祖たらしめる契機となったツォンカパの宗教改革のみは顕教と密教の絡み合いという純粋に教学的立場から起ったものであった。

チベット仏教において、パドマの地位を仕上げた契機たるチソン治下の法論、ランダルマの廃仏、ツォンカパの宗教改革、之等を行わしめた根拠たるインド仏教と中国仏教、仏教とボン教、顕教と密教、之等の諸要素は総て又、同時にチベット仏教にその特色を与える重要な要素であった。そして、パドマの存在が之等の諸

要素の相互確執を理由としてチベット仏教にその存在意義を持ちながらも、逆に彼の存在そのものがチベット仏教に欠くことの出来ない之等の要素を浮彫りにする結果を招いたのであった。チベット仏教をチベット仏教として成り立たせている基本的諸要素と絡み合って存在した処にこそ、パドマサムバーヴァのチベット仏教における特殊な地位があると云い得よう。

以上

(註)

1. サムエ寺の建立は前後12年の才月を要したと云われ、その規模において空前の伽藍をチベットに出現した。その全様式をオタンタブリーに取りながら、中央の三層の大講堂はその第一層はチベット式、第二層が中国式最上層をインド式の建築様式によって居ることも亦、何かを象徴するもの、ように思われる。
2. これがチベットにおけるタントラ經典講義の嚆矢とされている。タントリストとしてのパドマの面目を示すこと、なるであろう。
3. パドマの入蔵前後の事情、並びに入蔵後の活躍については所謂、チベット正史たる“Dpag-bsam-ljon-bzañ (S. C. Das 校訂本)” 170頁以下に、並びに Bu-ston の Chos-ḥbyuñ (Bkras-sis 版) 141b以下に詳述されている。又、中国資料としては「彰所知論」巻上、並びに「聖武記」巻第五“国朝撫安綏西藏記上”等に彼に関して記述されて居る。更に東北蔵外目録No.7045に“O-rgyan guru padma ḥbyuñ-gnas-kyi skyes-rabs rnam-par thar-pa rgyas-par bkod-pa, Padma khañi thañ-yig (本生伝記広説“蓮華勳命の書”)と称する伝記が収められている。
4. 元来、密教の教義によれば、仏教以外の諸神・諸尊が密教における根本仏たる大日如来の顕現と考える思想が存したから、彼にとってはこのような一種の垂迹説を唱えることも、単にボン教に対する迎合の意ばかりではなかったかも知れない。
5. Das 校訂本 Dpag-bsam P.170.
6. チソンが招いた入蔵僧について、チベット年代記“Hulan-deb-ther”では Shi-ba-tsho, Padma-ḥbyuñ-gnas, Vimāla-mitra, Śānti-garbhā, Viśuddhasiṃha, Dharmakīrti, Jinamitra, Dānaśīla, Kamalāsīla, 大乘和尚の10名の名が並記されている。之等すべての僧侶が入蔵したか否かは疑問としても、兎も角もチソンがボン教派の大臣達と対抗するため、インド・中国の学僧

を招来するのに如何に熱心であったか、その証左とはなり得よう。

7. 上掲本 Dpag-bsam P170

8. ボン教については H. Hoffmann の“Quellen zur Geschichte der tibetischen Bon-Religion”があり、その経典については寺本婉雅著「十万白竜」参照。

9. 後伝仏教が着目する処は仏教の復興すなわち戒の流伝の復興であった。この戒律の流れが三つの戒、即ち、波羅提木叉、菩薩戒・秘密戒の夫々に正しい系譜を保とうとしたものであり、その限りにおいては秘密教は戒の系譜の確立の上から必要であると考えられたのであった。

10. リンチェンはバドマの伝えた秘密教の復興に尽力したが、その教義に相違を生じた一つの理由として考えられる事は、彼の遊学地はインドでなく、ネパールに前後三回に亘って留学した事も挙げられよう。なお、リンチェンの伝記については Das 本 Dpag-bsam P182 参照。

11. Atisa の入蔵については「大崎学報」101号所収、“アティシャの入蔵とその功罪”参照。

12. Bu-ston “Chos-hbyun” (Bkras-sis 版) 142b。

13. 旧唐書卷196上、列伝146上。

14. 上掲本 Bu-ston 142b。